

# 東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	地域での暮らしを支援する看護師養成プログラムにおけるリアルな家での体験から導かれた学び
別タイトル	Learning from real life home experiences in a nurse training program to support community living
作成者（著者）	藤野, 秀美 / 横井, 郁子 / 御任, 充和子 / 小野, 真由子
公開者	東邦看護学会
発行日	2020.03.01
ISSN	21855757
掲載情報	東邦看護学会誌. 17(2). p.9 17.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	実践報告
著者版フラグ	publisher
JaLCDOI	info:doi/10.14994/tohokango.17.2.9
メタデータのURL	<a href="https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD26281942">https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD26281942</a>

【実践報告】

## 地域での暮らしを支援する看護師養成プログラムにおける リアルな家での体験から導かれた学び

### Learning from real-life home experiences in a nurse training program to support community living

藤野 秀美<sup>1)</sup>, 横井 郁子<sup>1,2)</sup>, 御任 充和子<sup>2)</sup>, 小野 真由子<sup>1)</sup>

Hidemi FUJINO<sup>1)</sup>, Yuko YOKOI<sup>1,2)</sup>, Miwako MITO<sup>2)</sup>, Mayuko ONO<sup>1)</sup>

#### 要 旨

【目的】 TOHO いえラボを利用して3コアプログラムを実施し、コアプログラム受講時と、受講後のフォローアップでの看護師に対するアンケートから得られた、リアルな家という学習環境での学びの内容について報告する。

【方法】 TOHO いえラボを利用した3コアプログラム受講時に各プログラムを受講した看護師から得られたアンケート70部と、3コアプログラム受講後半年から2年程度を経たフォローアップで得られたアンケート34部から、どのような学びがあり、その学びをプログラム受講後の実践でどう活用しているかに関する内容を抽出、コード化し、類似する内容をカテゴリー化した。

【結果】 プログラム受講直後では、【生活と生活する対象者をイメージする】【対象者の生活をアセスメントし具体的に思考する】【これまでの実践を振り返り今後の対象者への向き合い方を考える】【家のリアルな生活空間が学習者たちにもたらす強みと弱み】という4カテゴリー、受講後のフォローアップでは、【対象者の望みを尊重し生活背景を理解するよう支援する】というカテゴリーが抽出された。

【考察】 TOHO いえラボという学習環境で生活を具体的に感じ、看護の対象者が生活者であることを改めて理解し、対象者の持つ力を活かし、暮らしや望みを見据え、多職種と連携しながらケアを提供できる力を養うことに貢献し得ることが示唆された。

キーワード：看護師養成 リアルな家 体験 学び

#### I. 緒言

平成28年度版の厚生労働白書<sup>1)</sup>によると、「高齢化によって複数の慢性疾患を抱えながら地域で暮らす人が増加している。このような変化に対し、『治す医療』から『治し、支える医療』への転換が求められている。

同時に、地域での生活を支えるためには、急性期後の長期ケアに関わる医療、介護、生活支援等の各種の多様なサービスによって、住み慣れた地域での尊厳ある暮らしの継続を支援していくことが、高齢者個人の生活の質の向上へとつながる」と報告されている。超高齢社会においては、対象者の住み慣れた地域で支える

<sup>1)</sup> 東邦大学看護学部 <sup>2)</sup> 東邦大学地域連携教育支援センター

<sup>1)</sup> Faculty of Nursing, Toho University <sup>2)</sup> Regional Cooperation Education Support Center, Toho University

医療を提供できる人材が求められる。一方、これまで看護師は病院の中で提供する医療を中心に教育されてきており、今後は、対象者の暮らしを見据え、多職種と連携しながらケアを提供できる力を育成することが必要かつ急務となっている。

2014年度、超高齢社会において病院から暮らしの場へ医療・看護をつなぐ教育を充実させ、看護師の専門性を強化していくことを課題とし、看護系大学の教育の充実と、地域医療機関との連携を強化して新たな教育指導体制を構築するとともに、地域医療にも貢献できる看護師の養成を目的として、文部科学省によって「課題解決型高度医療人材養成プログラム－地域での暮らしや看取りまで見据えた看護が提供できる看護師の養成－」（以下、「文部科学省GP」）に関する取り組みが開始された<sup>2)</sup>。この文部科学省GPにおいて、大学の「都市部の高齢社会に挑む看護師の養成事業－大学と地域でシビックプライドを持った看護師を継続的に育てる仕組みを作る－」が採択された。本事業は、看護の対象者は地域で暮らす生活者であることを意識し、医療ケアチームの一員として他職種と連携しながら対象者の生活を推測し、その人の望む生活を支援することができる看護師の養成を目指すものである。この目標を達成するために、街中の集合住宅の一室に「いえラボ」という学習拠点を構築し<sup>3)</sup>（以下、「TOHOいえラボ」）、7つのコアプログラムを開発し実施した。

学習拠点であるTOHOいえラボは、単に家という場があるのではなく、75歳女性の坂東邦恵氏という仮想住人が暮らしているという設定がある。TOHOいえラボのあるこの町に嫁ぎ50年余り家族とともに暮らし、一人暮らしになってからは、坂東氏の人となりやこだわりが込められた家である。このTOHOいえラボを活用したコアプログラムは3つあり、この家の住人である坂東氏が、病気や障害を持ちながらもこの家で暮らし続けるにはどのような支援が必要かを、看護職および他職種と協働し、体験やグループでの演習、議論を通して考察していく。またこれらのコアプログラムでは、看護の対象者の暮らしを捉え、対象者の暮らしを踏まえた具体的な支援を考察するという目標を掲げており、受講生のレポートなど成果物から評価するとこの目標はほぼ達成できていた<sup>4)</sup>。しかし、

TOHOいえラボというリアルな学習環境が、受講者にどのような学びをもたらしたのかについては明らかではない。

よって本研究では、看護師を対象とし、TOHOいえラボを活用したコアプログラム受講時に得られたアンケート、ならびに受講後半年から2年を経て実施したフォローアップの際に得られたアンケートから、本事業で構築したTOHOいえラボという学習環境でどのような学びがあり、その学びが看護実践にいかに関与されたかを検討する。これらの分析により、今後の継続的で効果的なTOHOいえラボの運用とともにプログラム内容を向上させ、対象者の望む暮らしを見据え、他職種と連携しながらケアを提供できる教育への活用が期待できる。

## Ⅱ. 目的

TOHOいえラボを活用して3つのコアプログラムを実施し、コアプログラム受講時と、受講後のフォローアップでの看護師に対するアンケートから得られた、リアルな家という学習環境での学びの内容について報告する。

## Ⅲ. 方法

### 1. TOHOいえラボを活用した3コアプログラムとフォローアップの内容

#### 1) 生活機能アセスメントプログラム

受講者は看護職と介護職である。TOHOいえラボ住人の坂東氏が脳梗塞のため急性期病院に入院し、治療を受けリハビリテーションを行い、家で生活を望んでいるという事例を基に、坂東氏が家で暮らしていくために、何をアセスメントしどのような支援が必要かを看護職と介護職で構成したグループでのワークを通して考察する。グループメンバーが坂東さんになって実際の食事と排泄行動を体験し、他のメンバーがその様子を観察し、議論しながら考察を深める。

#### 2) 医療ケアチーム育成プログラム

受講者は看護職である。医療が必要な状況でも家で暮らしていくためにどのような支援が必要かを考察する。身体状況をアセスメントする超音波エコーや治療

のための在宅酸素療法、中心静脈栄養法を学び、グループで議論をしながら急性期、回復期、在宅におけるそれぞれの看護の役割と、医療をつなげ継続するための支援を再考する。

### 3) 緩和ケア連携プログラム

受講者は看護職と介護職である。ケア対象者が住み慣れた地域で病や障害を抱えながら最期のときまで暮らすためにどのような支援が必要かを考察する。最期のときまで生きる力となる生活機能である食事に着目し、摂食嚥下によって起こり得ることを予測する看護職と、食べたいものを食べやすい形にする介護職が、演習と議論を通して自らの役割と互いの役割を再認識し、対象者への支援について考察を深める。

### 4) コアプログラム受講後のフォローアップの内容

3コアプログラムを受講した看護師に対し、受講後半年から2年程度経過した時点でフォローアップの場を設けた。プログラムでの学びが看護師自身の中でどのように深まり、どのように実践に影響しているかなどについて自由に語ってもらい、共有した。

## 2. 調査対象

2015年10月～2017年11月までに、TOHO いえラボを活用した3コアプログラムの受講時に各プログラムを受講した看護師から得られたアンケート70部と、これら3コアプログラム受講者に対して受講後半年から2年程度を経た2018年2月に実施したフォローアップ参加者から得られたアンケート34部を対象とした。受講時のアンケートの内訳は、急性期病棟勤務が58部(83%)、回復期リハビリテーション病棟勤務が7部(10%)、訪問看護事業所勤務が5部(7%)であり、フォローアップでのアンケートは、急性期病棟勤務31部(91%)、回復期リハビリテーション病棟勤務1部(3%)、訪問看護事業所勤務2部(6%)であった。

## 3. 調査内容

### 1) アンケート実施方法

#### (1) 受講時のアンケート

3コアプログラムをそれぞれ実施した終了時に、アンケートの目的、自由意志に基づき実施すること、得られたデータの管理等について説明しアンケートを配

布し、回答後のアンケートは箱へ投函とした。3コアプログラム参加看護師総数70名に配布し70部回答が得られた(回収率100%)。

#### (2) フォローアップでのアンケート

フォローアップへの参加看護師名に対し、フォローアップ終了時にアンケートの目的、自由意志に基づき実施すること、得られたデータの管理等について説明しアンケートを配布し、回答後のアンケートは箱へ投函とした。フォローアップへの参加看護師中3コアプログラムを受講した看護師は34名で34部回答が得られた(回収率100%)。

### 2) アンケート内容

#### (1) TOHO いえラボを活用した3コアプログラム受講時のアンケート

各プログラムにおいて以下の内容を尋ねた。

生活機能アセスメントプログラムでは、①いえラボでの講義および演習はどうか、②本プログラムでの学びは実践に活かそうかについて、「よかった」あるいは「そう思う」から、「よくなかった」または「そう思わない」の4件法で尋ね、そう考える理由を自由記載とした。

医療ケアチーム育成プログラムでは、①プログラムに関する意見や感想、②プログラムでの学びは実践に活かそうかについて、①については自由記載、②については「そう思う」から「そう思わない」の4件法で尋ね、そう考える理由を自由記載とした。

緩和ケア連携プログラムでは、①プログラムに関する意見や感想、②プログラムでの学びは実践に活かそうかについていずれも自由記載とした。

#### (2) 3コアプログラム受講後のフォローアップでのアンケート

①どのように実践に活かしているか、②フォローアップに参加した感想を自由記載とした。

(1)、(2)ともに各コアプログラムまたはフォローアップ終了時に実施し、職種を尋ねた。

## 4. 分析方法

TOHO いえラボという学習環境でどのような学びが促されたか、その学びをプログラム受講後の実践でどう活用しているかに関する内容を抽出、コード化し、

類似する内容をカテゴリー化した。分析にあたり、研究者間でデータとデータが示す意味内容を繰り返し確認し、質的研究の専門家に確認をしながらコード化し、内容の類似性を確認しながらカテゴリーを生成した。

## 5. 倫理的配慮

アンケートはすべて無記名で実施した。アンケートの実施にあたり、収集と利用目的、得られたデータの管理等について説明し、同意書へのサインを得た上で

表1. コアプログラム受講時のアンケート内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
生活と生活する対象者をイメージする	生活を容易にイメージできる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・具体的なことをイメージできる</li> <li>・家での生活に視点を向けられる</li> <li>・退院後の生活を以前よりイメージしやすい</li> <li>・生活をイメージしやすい</li> <li>・イメージが付きやすい</li> </ul>
	患者を生活者としてイメージする	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活をする存在として対象者を見る</li> <li>・生活者としての患者をイメージするのに役立つ</li> <li>・家で暮らす人を身近に感じられた</li> </ul>
対象者の生活をアセスメントし具体的に思考する	生活をアセスメントする視点への気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・どの視点でアセスメントするとよいか理解できた</li> <li>・どのような根拠でアセスメントするかを考えやすい</li> <li>・エビデンスに基づいてアセスメントする大切さを再認識</li> <li>・どこをアセスメントするのか気づけた</li> <li>・生活することに視点を置いてアセスメントできた</li> <li>・アセスメントの視点や重要性など教育に活用できる</li> </ul>
	体験することでの気づきや思考	<ul style="list-style-type: none"> <li>・より具体的に対象者を考え体験できた</li> <li>・実際に見て体験することで気づきが多い</li> <li>・実践してその場で考えられる</li> <li>・実際の家で対象者を体験できたことが学びになる</li> <li>・実際に体験することで学びがある</li> </ul>
	この家の住人だからできること・できないことが具体的にわかる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分でできること困難なことがわかる</li> <li>・日常生活の問題や大変さを理解できる</li> <li>・対象者が暮らしている家だからできることもある</li> <li>・具体的な工夫を考えられる</li> <li>・家で体験することでできることがわかる</li> </ul>
これまでの実践を振り返り今後の対象者への向き合い方を考える	生活を理解して支援していたという思い込みへの気づき	<ul style="list-style-type: none"> <li>・自宅での生活を理解しているようでそうではないことに気づく</li> <li>・主観的考えでアセスメントしていたことに気づく</li> <li>・退院支援ができたつもりだったことがわかった</li> </ul>
	生活者である対象者への向き合い方を考える	<ul style="list-style-type: none"> <li>・簡単に社会資源の活用を勧めないようにしたい</li> <li>・家での活動をイメージしたりハビリを考えたい</li> <li>・家で生活している人が何を求めているのかもっと向き合いたい</li> <li>・家をイメージし、退院支援に必要な情報を考えて活かしたい</li> </ul>
家のリアルな生活空間が学習者たちにもたらす強みと弱み	緊張感なく率直な議論ができる	<ul style="list-style-type: none"> <li>・良い意味で緊張感がほぐれる</li> <li>・初めて会う人ともディスカッションしやすい</li> <li>・受講者の距離が近く話しやすい</li> <li>・本音で話し、良いディスカッションができる</li> <li>・安心感があり集中できる</li> </ul>
	部屋で演習することでの支障	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人数に対して部屋が狭い</li> <li>・畳で座っている姿勢が辛い"</li> </ul>

実施した。また、本研究は東邦大学看護学部倫理審査委員会の承認を得て実施した（承認番号：30001）。

#### IV. 結果

以下、カテゴリーは【 】, サブカテゴリーは< >, コードは「 」, データは“ ”で示す。

##### 1. コアプログラム受講時のアンケート内容

プログラム受講直後に得られたアンケートでは、【生活と生活する対象者をイメージする】【対象者の生活をアセスメントし具体的に思考する】【これまでの実践を振り返り今後の対象者への向き合い方を考える】【家のリアルな生活空間が学習者たちにもたらす強みと弱み】という4カテゴリーが生成された（表1）。

【生活と生活する対象者をイメージする】では、<生活を容易にイメージできる><患者を生活者としてイメージする>というサブカテゴリーが含まれた。実在するマンションの一室で受講者自らが体験することにより、生活の「具体的なことをイメージできる」「家での生活に視点を向けられる」ことができていた。また、「退院後の生活を以前よりイメージしやすい」ことから、<生活を容易にイメージできる>ことを実感していた。さらに、“生活する存在として坂東さんを見ることができた”ことから、「生活をする存在として対象者を見る」「生活者としての患者をイメージするのに役立つ」という<患者を生活者としてイメージする>ことができていた。

【対象者の生活をアセスメントし具体的に思考する】では、<生活をアセスメントする視点への気づき><体験することでの気づきや思考><この家の住人だからできること・できないことが具体的にわかる>というサブカテゴリーが含まれた。“具体的に対象者を考え体験できた”ことから、「どの視点でアセスメントするとよいか理解できた」「どのような根拠でアセスメントするかを考えやすい」「エビデンスに基づいてアセスメントする大切さを再認識」するという<生活をアセスメントする視点への気づき>をしていた。また、実在する家で受講生自身が事例の坂東氏になりきって生活を体験することを通して、「より具体的に

対象者を考え体験できた」「実際に見て体験することで気づきが多い」ことや、“リアルタイムで環境を確かめながら進められる”という「実践してその場で考えられる」ことを感じ、「実際の家で対象者を体験できたことが学びになる」というように<体験することでの気づきや思考>を実感していた。さらに、事例の設定になりきっての体験から、「自分でできること困難なことがわかる」「日常生活の問題や大変さを理解できる」「対象者が暮らしている家だからできることもある」という<この家の住人だからできること・できないことが具体的にわかる>と実感していた。

【これまでの実践を振り返り今後の対象者への向き合い方を考える】では、<生活を理解して支援していたという思い込みへの気づき><生活者である対象者への向き合い方を考える>というサブカテゴリーが含まれた。

“今までも重視していたが、聞いたつもりになっていたかもしれない”というように、「自宅での生活を理解しているようでそうではないことに気づく」「主観的考えでアセスメントしていたことに気づく」といった、<生活を理解して支援していたという思い込みへの気づき>をしていた。また、“退院支援を考えるとヘルパーをつけようとか柵をつけようとか簡単にいわないようにしたい”というような「簡単に社会資源の活用を勧めないようにしたい」と思い、「家での活動をイメージしたりハビリを考えたい」「家で生活している人が何を求めているのかももっと向き合いたい」という<生活者である対象者への向き合い方を考える>思考に至っていた。

【家のリアルな生活空間が学習者たちにもたらす強みと弱み】では、<緊張感なく率直な議論ができる><部屋で演習することでの支障>が含まれた。生活の場であるマンションの一室で議論することは、受講生に「良い意味で緊張感がほぐれる」「初めて会う人もディスカッションしやすい」「受講者の距離が近く話しやすい」という感覚をもたらした。一方で、“長時間畳で座っているのはつらい”といった「人数に対して部屋が狭い」「畳で座っている姿勢が辛い」という<部屋で演習することでの支障>を感じていた。

表2. コアプログラム受講後のフォローアップでのアンケート内容

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
対象者の望みを尊重し生活背景を理解するよう支援する	対象者の生活背景を意識したかわり	<ul style="list-style-type: none"> <li>・地域の中の家で過ごす重要性を再認識</li> <li>・対象者の目線や生活を意識する</li> <li>・実際の生活の場を確認し、地域部門との連携を図る</li> <li>・対象者の生活背景や残存機能を踏まえたアセスメントによる退院支援の実践</li> <li>・対象者の自宅での暮らしを意識した情報収集</li> <li>・自宅での生活をイメージしながら対応</li> </ul>
	対象者の望む暮らしへの真意を探る	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家に帰れないという考えから帰れる可能性がある見方への変化</li> <li>・本人の思いに立ち返る</li> <li>・対象者のこだわりを理解する</li> <li>・本人がどう暮らしたいかをしっかり確認する</li> </ul>

2. コアプログラム受講後のフォローアップでのアンケート内容

受講後のフォローアップで得られたアンケートでは、【対象者の望みを尊重し生活背景を理解するよう支援する】というカテゴリーが抽出され、＜対象者の生活背景を意識したかわり＞＜対象者の望む暮らしへの真意を探る＞というサブカテゴリーが含まれた(表2)。プログラムでの学びから、半年または数年の時を経て、「地域の中の家で過ごす重要性を再認識」し、「対象者の目線や生活を意識する」ようになり、「実際の生活の場を確認し、地域部門との連携を図る」「対象者の生活背景や残存機能を踏まえたアセスメントによる退院支援の実践」という＜対象者の生活背景を意識したかわり＞をするようになっていた。また、「家に帰れないという考えから帰れる可能性がある見方への変化」があり、「本人の思いに立ち返る」「対象者のこだわりを理解する」という＜対象者の望む暮らしへの真意を探る＞という行動を取るようになっていた。

V. 考察

まず抽出されたカテゴリーに沿って考察し、その後総合的考察を述べる。

1. 生活と生活者をイメージする

看護の対象者には自宅での生活があり、生活をする人であることを容易にイメージしていることが示された。

日本看護協会は、2025年に向けた看護の挑戦看護の将来ビジョンにおいて、看護は、対象となる人々を、どのような健康状態であっても、人生を生きる一人の個人として総合的に見る。つまり「疾病」を見る「医療」の視点だけではなく、生きていく営みである「生活」の視点をも持って「人」を見ることにその専門職としての価値を置く<sup>5)</sup>としている。地域包括ケアの時代に入り、退院後の生活をイメージでき、地域の看護師と顔の見える連携強化を目的として、各地で急性期病棟の看護師が地域での看護を経験し、退院前訪問などの取り組みが行われるようになり、「生活の場で見ることにより施設や在宅療養がイメージできる」という声が聞かれている<sup>6)</sup>。部分を切り取ったモデルルームではない実在の家は、暮らしの現実感があるため、より具体的な印象を受講者に与える。本研究で対象としたアンケートにおいて回答者の約85から9割が急性期病棟勤務の看護師であり、普段は目にすることのない対象者の生活を家という場で体験することで、生活や生活者としてのイメージが促されたと考えられる。

また、TOHO いえラボを活用したプログラムでは、そこに暮らす仮想住人を設定し、その人の生活を受講者が体験しながら考えるような構成にしている。模擬患者を置くのではなく、仮想住人を設定して、その住人に受講生がなりきって生活を体験することで、コミュニケーションだけで対象者を捉えようとするのではなく、さまざまな生活状況を受講者自身が実感して想像し、考えることを可能にしたとも考えられる。

## 2. 体験を通して生活をアセスメントし具体的に思考する

実際の家で、設定した事例になりきって生活を体験することを通して、生活の中で何が難しく何が容易なのかを知り、アセスメントする視点に気づいていたことが示された。

高齢社会において患者の状態が複雑になる中で、身体のアセスメントだけでなく患者の自宅の環境や家族関係などの生活面において、高いアセスメント能力が求められるようになってきている<sup>7)</sup>。これまでにも、在宅での生活を想定したシミュレーション室を活用し、看護基礎教育の段階から、生活者としての看護の対象者を捉えるための演習等が行われている。シミュレーション室のような模擬的に創出された設定でも、食事や排泄のみといった生活の一部を体験し理解することはできる。しかし、実際の生活はさまざまな事柄が連続しており、断片を知るだけでは対象者の生活を捉えた適切な支援にはつながりにくい。TOHO いえラボは実際の家であり、朝起きて洗顔し、身支度を整える、調理をして食べた後には片付けてゴミを処理する、何かをしている途中でトイレに行き排泄をして部屋に戻る、夜は風呂に入り寝間着を着て寝るといった、起床から就寝、就寝中までの24時間の生活の連続性を理解することが可能である。生活の中での具体的な困難さや容易さを体験によって実感することができるため、より印象深く学ぶことが可能であり、より具体的にアセスメントの視点に気づくことにつながったと考えられる。

また、急性期病院における調査で、経験を重ねるにつれ退院後療養生活を予測した支援が行えるようになること<sup>8)</sup>、中堅看護師を対象とした調査で「患者＝生活者」として捉え生活援助を実践していたこと<sup>9)</sup>が示されている。TOHO いえラボで家での生活を体験することで、経験を重ねることを待つのではなく、経験が浅い看護師でも、生活をアセスメントする視点を深められることが期待できる。

## 3. これまでの実践を振り返り、今後の対象者への向き合い方を考える

自宅での生活を理解して支援をしていたという思い込みに気づき、今後どのように対象者と向き合ってい

くかを考えていることが示された。

病院で働く看護師は、病棟・手術室・外来勤務など患者の連続した治療経過から切り取られた一部のみを担当し、全体を見る機会がなく仕事が行われ、「生活を看る」視点での患者理解ができにくくなってしまうことが指摘されている<sup>10)</sup>が、その状況にあっても、患者＝生活者という視点を持ち、支援を実践していると評価する看護師は少なくない<sup>8)</sup>。しかし、実在する家での体験から、受講生は、前項でも述べた生活の連続性などに気づき、対象者の退院後の生活への理解が十分ではないと振り返り、それを踏まえて今後どのように対象者へ向き合うかを考えたのではないかと。

成人教育の視点では、経験は学習のための資源であり、学習者の経験を活用するために、「知識伝達の技法よりも経験開発的技法」が強調され、学習者自身が「学習の必要性を自覚する」レベルを高め、「現在の自分とそうありたい自分との間のギャップ」を見出す経験が有効であるとされている<sup>11)</sup>。成人期における学習のプロセスの一つに、①新しい経験をして、②これらの経験を多用な観点から振り返り、③統合的な考えや概念を生み出して、④これらの新しい思考や概念を実践に応用するというコルブが示した経験学習のモデルがある<sup>12)</sup>。本研究の結果から、TOHO いえラボでの経験は、これまでの看護師としての経験を踏まえて、より統合的な思考を生み出して実践へと応用させる学習資源となり得ることが考えられる。

一方、学習の支援者は、学習の必要性を高めるような支援を心がけることであり、伊原によると「経験の蓄積は精神的習癖や先入観など、自らを閉ざす傾向を生むので、学習者自身の習癖とバイアスを確かめ、新しいアプローチに対して心を開かせるような支援をしなければならない」とされている<sup>11)</sup>。受講者は、おおむね実践してきた現状を受け止め前向きな思考をしていたが、プログラムを運営する側としては、成人学習のプロセスを理解して受講者が統合的な思考を生み出せるよう支援する必要がある。これまでの実践を否定するのではなく、実践してきたことを評価しつつ、新たな経験をどのようにするとより対象者を理解し、適切な支援につながるかを考えられるような働きかけをする必要がある。



#### 4. 家の住人のリアルな生活空間が学習者たちにもたらす強みと弱み

家という場は、緊張感が解かれ、効果的なディスカッションを可能にする半面、学習を主眼とした構造ではないことから、姿勢などに負担がかかることが示された。

教室などの学習を主眼とした環境では、机上の学習に適切な必要最低限のもので構築されており、机上の学習での姿勢は考慮されているものの、学習に向かう緊張感を少なからず受講者に抱かせる可能性がある。一方、家は、生活が中心的に営まれる場であり、社会的立場や役割から解放され、自分自身の思うままにくつろぐ場でもある。よって、家という場では、緊張感のない日頃の家での自分に戻り、構えることなく語り合える状況が創り出されていると考えられる。

半面、家という環境は、前述した教室などの環境とは異なるため、学習者にとって苦痛を生じる環境となり、学習効果を減じる可能性もある。プログラムの内容によって場を使い分け、スケジュールを調整するなど、学習者に配慮した対応が求められる。

#### 5. 対象者の望みを尊重し生活背景を理解するよう支援する

受講後、数ヶ月から数年の実践を経て、対象者の目線で生活をイメージした支援とともに、対象者がどう暮らしたいかという望み、そして対象者の持つ力をアセスメントして支援していることが示された。

プログラムを通して生活を具体的にイメージし、アセスメントの視点に気づいたことは、実践を経て対象者それぞれの背景を捉えることを重視することにつながっていた。看護の対象者はそれぞれに異なった疾患や障害、生活史、暮らしへのこだわりや望みを抱いている。対象者の生活や生活者として対象者を看るということは、これら対象者の背景を含めた全体を捉え、支援することにほかならない。特に高齢者の看護では、高齢者の加齢に伴う身体・心理・社会的機能の低下を含む状態を適切に判断・アセスメントし、その人にとって適切な介入（支援）を行うことで、その人の療養生活上のリスクや問題を回避・改善・解決し、その人の持つ力を最大限に引き出し、QOL向上、尊厳の保持、自己実現を叶えることが目標とされている<sup>13)</sup>。

TOHO いえラボという学習環境は、看護師として対象者の暮らしを見据え、多職種と連携しながらケアを提供できる力を育成する可能性があることが示された。

一方、フォローアップの場で、アンケートへの記載はないものの、「まだ思うように実践できていない」という声が聞かれた。このことから、学びを実践に落とし込めていないこと、他者を巻き込みながら実践していく方法を見出せずにいることなど、受講生個人の背景や置かれる状況が影響し、学びを実践に活かしていない現状があると推測される。学びを実践に活かせるようにすることを視野に入れたプログラムを検討する必要もある。

#### 6. 総合的考察

TOHO いえラボという学習環境で生活を具体的に感じることで、看護の対象者が生活者であることを改めて理解していることが示された。この理解は、これまでの対象者への支援を振り返る契機となり、今後看護師としてどのように対象者と向き合い、支援するかを考えることにも及んでいる。

地域包括ケア時代の看護師には、患者・家族のこれからの生活をイメージし、自助力を見出し高める力を持ち、対象者の望む生活に主眼をおき、対象者の健康状態を把握し、必要な看護を導くアセスメント能力、療養者の置かれた場に応じた看護実践力を持って多職種と連携・協働することが求められる<sup>14)</sup>。本事業で構築した TOHO いえラボという学習環境は、このような対象者の持つ力を活かし、暮らしや望みを見据え、多職種と連携しながらケアを提供できる力を養うことに貢献し得ることが示唆された。

また、受講後は、対象者の生活環境を理解することに加え、対象者の暮らしへの望みを捉えようとする姿勢が見られた。これらのことから、リアルな家という学習環境は、対象者が望む暮らしを支援するという看護師として生活者を支援する基本に立ち戻り、その支援の本質を追求する効果があると考えられる。つまり、TOHO いえラボという学習環境は、これまでの看護師としての経験を振り返り、深め、開発する契機を与える可能性が示唆された。

さらに、「生活」とは、その人と環境の相互作用で形

成されると考えられ、看護師にとって重要なのは、看護を必要とする人、その人自身が自律的に環境である「地域」と関わり、自分で生活を創り上げていくという主体性を持った存在と捉えることであるとされている<sup>15)</sup>。体験を通して、地域の中での生活も実感できるような内容や働きかけができると、対象者の背景をより厚みを持って理解することが可能となると考えられる。

## 7. 今後の展望

看護師に対する教育プログラムでは、成人学習の特徴を踏まえ、学習者の内発的動機を高め、経験を尊重しつつ新たな可能性を広げるような働きかけが必要である。TOHO いえラボという学習環境をより効果的に活用するために、プログラムの運営側が成人教育を見据えて学びを支援するスキルを向上させ、実践へとつなげる方法も検討する必要がある。また、学習するための環境として考慮すべき点も明らかとなったことから、プログラムの内容やスケジュールを工夫し、より快適に集中して学びを深められるように、TOHO いえラボの活用を検討する必要がある。

本研究は、2019年6月6～8日に開催された日本老年看護学会第24回学術集會にて発表した。

本研究における利益相反は存在しない。

## 引用文献

- 厚生労働省：平成28年版 厚生労働白書（平成27年度厚生労働行政年次報告）—人口高齢化を乗り越える社会モデルを考える 第4章 人口高齢化を乗り越える視点 第3節 地域で安心して自分らしく老いることのできる社会づくり. 147, 2017.
- 文部科学省高等教育局医学教育課：（参考）課題解決型高度医療人材養成プログラム（平成26年度選定）.  
([https://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/education/detail/\\_icsFiles/afieldfile/2014/08/15/1350317\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2014/08/15/1350317_1.pdf), 2020.1.24)
- 地域連携教育支援センター TOHO いえラボ.  
(<https://www.toho-u.ac.jp/nurs/ielab/>, 2020.1.14)
- 藤野秀美, 四本竜一, 江島一考 他：都市部の超高齢社会に挑む看護師養成事業—生活機能アセスメントプログラムにおける多職種協働学習での学び—. 東邦看護学会誌, 15 (2) : 37-44, 2018.
- 公益社団法人日本看護協会：「看護の将来ビジョン」で新たな挑戦 2025年に向けた看護の挑戦 看護の将来ビジョン ～いのち・暮らし・尊厳をまもり支える看護～. 看護, 67 (10) : 74-85, 2015.
- 永安千春, 若山芽衣, 白石和加枝 他：地域と急性期をつなぐ地域包括ケア 病棟看護師の役割. 看護実践の科学, 42 (10) : 21-28, 2017.
- 齋藤訓子：これからの看護職は「地域がわかる」「地域でできる」へ. 看護展望, 41 (10) : 48-52, 2016.
- 藤原奈佳子, 小野薫, 森田恵美子：急性期病院における病棟看護師の退院支援に関する自己評価. 愛知県立大学看護学部紀要, 19 : 49-59, 2013.
- 徳原典子：あらためて生活行動援助から看護を考える 急性期病院に勤務する中堅看護師が行う生活援助の卓越性. 看護実践の科学, 43 (13) : 41-45, 2018.
- 板垣昭代：教育と実践を経て院内に“生活を見る”視点を伝える. COMMUNITY CARE. 15 (1) : 57-58, 2013.
- 伊原千晶：成人教育の観点から見た対人援助職教育. 人間文化研究：京都学園大学人間文化学会紀要, 38 : 17-35, 2017.
- 立田慶裕, 三輪健二（監訳）, シヤラン・B・メリアム, ローズマリー・S・カファエラ（著）：第三部 学習のプロセス 第10章 経験と学習. 成人期の学習—理論と実践—, 鳳書房, 東京, 2009.
- 福井小紀子：高齢者の生活を支える視点が重視される背景と老年看護学の方向性. 日本臨床, 76 (7) : 705-710, 2018.
- 場啓子：地域包括ケアシステムを見据えた看護教育 地域包括ケアシステムの時代に活躍できる看護師をどう育てるか 地域包括ケアシステムにおける看護実践者育成に向けて 体験することで深める地域包括ケアシステムの理解. 看護展望, 41 (10) : 19-24, 2016.
- 長江弘子：“地域”への視野を持つナースを育てる—地域社会を見据えた基礎教育の試み— 育てたい「継続看護マネジメント」という看護師のまなざし. 看護展望, 39 (5) : 14-19, 2014.